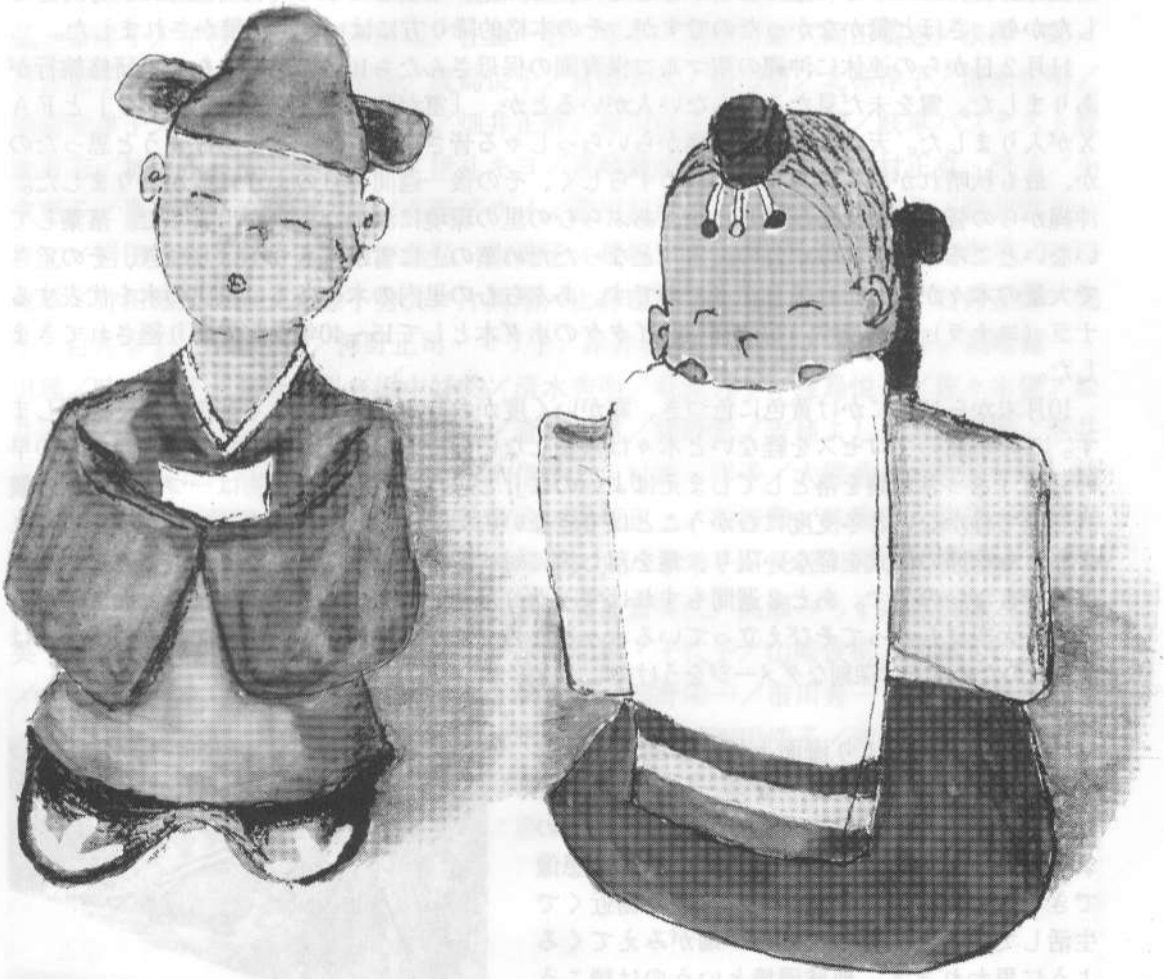
あぶらむ通信

第24号　2002年12月　　あぶらむの会発行
〒509-4121　岐阜県吉城郡国府町宇津江
TEL 0577-72-4219　FAX 0577-72-4494
E-mail : abram@kokufu.net
URL http://www.kokkufu.net/~abram/



「ソウルの街角で見つけた土人形」
絵　イク　オオゴ

飛騨便り

2002年もわずかとなりました。本当に一年の経つのが早いですね。あぶらむ通信をお手の皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。

今年もいろんな出来事があったあぶらむです。超不況というご時世なのに沢山の人々に訪ねていただき勇気づけられた事や、季節はずれの雪に泣かされたことなど様々です。いくつかのことを手記風に書いてみました。

●季節はずれということ

天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。生きるに時があり、死ぬるに時があり、植えるに時があり、植えたものを抜くに時があり、殺すに時があり、癒すに時があり、こわすに時があり、建てるに時があり、泣くに時があり、笑うに時があり、悲しむに時があり、踊るに時があり…… これは旧約聖書伝道の書の一節です。

「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある」私はこの言葉にいつもどこかひかれます。

10月29日、あぶらむの里に初雪がきました。この地に生活してからの初雪記録は10月31日でしたから、さほど驚かなかったのですが、その本格的降り方にはいささか驚かされました。

11月２日からの連休に沖縄の聖マルコ保育園の保母さんたち10名のあぶらむの里研修旅行がありました。雪を未だ見たこともない人がいるとか、「雪が降ることを願っています」とＦＡＸが入りました。天がはるばる沖縄からいらっしゃる皆さんに雪を見せてあげようと思ったのか、最も秋晴れが続く11月初旬にはめずらしく、その後一週間毎日のように雪が降りました。沖縄からの皆さんは大喜びでしたが、あぶらむの里の環境に深刻な被害が出ました。落葉していないところに“季節はずれの大雪”となったため葉の上に雪が積もりへばりつき、その重さで大量の木々がへし折れてしまったのです。あぶらむの里内の木の多くは里山の木を代表するナラ（コナラ）の木です。薪炭林やシイタケのホダ木として15～40年などで切り廻されてきました。

10月末から11月にかけ黄色に色づき、霜がいく度かおりると葉をかたく茶色にして落葉します。この季節のプロセスを経ないと木々は落葉しないのです。ものごとに対して身変わりの早い私は「さっさと葉を落としてしまえばよいのに」と思うのですが、植物は一つ一つ季節の儀式を経て行かないと冬支度にむかうことはできないのです。雪の重さで自分の身がへし折られようとも季節の儀式を経ない限り、葉を落し雪に対する抵抗を少なくし冬にそなえるということはできないのです。あと２週間もすればすっかり落葉してしまう木々、どれだけ大雪になろうとも大空にむかってそびえ立っている木々達なのですが、このたった２週間余りの「季節はずれ」のため木々は深刻なダメージをうけてしまったのです。

「地球温暖化により海面上昇○○㎜」「平均気温○度上昇」というようなニュースが報道されます。それらの出来事が私たちの生活にどのような影響を与えるのか、私たちの多くは想像できないのが現実です。しかし自然の側近くで生活していると、その現実の一端がみえてくるように思われます。地球環境というのは精こうな精密機械のようなものなのだということを！一年という長い季節の移り変わりの中で、たかだか２週間ほど時のおとずれがずれるだけで木々

季節はずれの雪被害、倒木処理はいのちがけ

は深刻なダメージをうける。季節が規則正しく移って行くということがいかに大切なことなのか、「季節はずれの大雪」に地球の環境問題を考えさせられるのです。

雪も一段落したので敷地内を見廻りました。この雪で弓なりに曲がったものや中ほどでへし折れたもの、また根こそぎ倒れたものなど、その数百本以上となりました。このような大きな力で無理矢理にへし折られた木を倒すのは非常に危険が伴うのです。大きな力がかかってへし折れた木には我々の予想を越えたエネルギーがかかっています。切り倒す時、それはあたかも強くまかれたゼンマイネジが切れてはじけるように、巨大なエネルギーを爆発させてはじけるのです。倒木処理は死と隣り合わせの最も危険な作業なのです。

●大切な人々との別れ

2002年はあぶらむにとって、また、私個人にとっても大切な人々とのお別れの年となった。寂しい限りです。

山城タケさん94才、「転んだら起きる」私に人生の良き旅人の何たるかを教えてくれた人の一人であった。16才でハンセン病を発病し、18才～28才までの人生で一番華やぐ時の11年間、家族と別れ人里離れた海岸で一人で暮らした。夕暮れ時が一番淋しく辛くて、一人泣いたという。一番恐かったものは猛毒のハブ蛇でも何でもなく「人間が一番恐かった」という言葉に胸が痛んだ。

私たちの想像を絶するような人生を歩んできたタケさん、「長い人生、山坂沢山ありますよ。転ぶこともありますよ。でも転んだら起きあがりなさいね」と私に話した。私はその言葉にどれだけ支えられ、導かれてきたことだろうか。心の母親をなくしたようで寂しい限りである。

武原春美さん58才、私を沖縄愛楽園へ導いてくれた人である。1964年、ホテル学校の研修でハワイに行った時出会った人で、彼女が留学先まで大切にもってきていた一冊の本、愛楽園産みの親青木恵哉師の「選ばれた島」によって私は沖縄へと導かれ今日となった。私の人生の道先案内人だった。

また、町有地であった現在のあぶらむの里の敷地を、お金も何もなくただ夢だけをもっていた身元不確かな私に売って下さった川上廣之前国府町町長。

私の身元確認のため町三役と共に立教大学までおいでになり「ああー、これでやっと安心して町に帰って報告できます」と安堵されたモッチョさん（元町長のイミで川上町長の愛称）。こんないい加減な私に大切な町有地をよく売って下さいました。大きなカケだったと思います。私はそんなあなたに絶対迷惑はかけてはいけないと今日ここまで頑張ってきました。あなたの決断がなかったらあぶらむの里は誕生しませんでした。飛騨の国府にあぶらむ在りといわれるよう今後とも精進いたします。ありがとうございました。

そして木俣宣道さん、あなたがご寄付して下さったユンボ（パワーシャベル）がなかったらあぶらむの里の建設は進みませんでした。全くの手作業で切り株一つ取り除くのに10日ほどかかった開拓初期。土木業者に依頼する資金など一銭もなかった私は全ての作業を自分でやるしかなかった。そのためにはどうしても中古品でいい、ユンボが必要だった。そんな私の願いをきいて下さり、あなたはあぶらむにユンボを寄付して下さいました。あぶらむで13年間働きに働き、時には木の伐採事故から私の命を守ってくれたユンボはあなたの死と時を同じくして動かなくなってしまいました。解体業者に引き取られて行く時、私は戦友を見送るような気持ちで涙が流れて仕方がありませんでした。「長い間この仕事をしていて、こんなにおしまれて見送られる機械なんて始めてだ」といった解体業者の言葉が私にとってせめてものなぐさめでした。ありがとう

戦友との別れ。遺影を胸に木俣宣道夫人、ご苦労様でした。

ございました。

また磯貝澄美子さん、「本人の遺言の中にあぶらむの会への協力がありましたので」私はその電話で初めてあなたの逝去を知りました。一度きりのあぶらむの里訪問、そんなあなたが毎年クリスマスに忘れることなく私たちを力強く支えて下さいました。多くの人々に見守られ、支えられて私たちの働きが今日あることを教えられました。ありがとうございました。

今年は本当に多くの大切な人々とのお別れの年だった。多くの人に導かれ支えられてここまで歩んできた。その人たちの思いをしっかりと受けとめて生きなければならないと、改めて強く感じさせられた1年でした。

●あぶらむトラストとNPO

昨年7月、話のあったあぶらむの敷地と地続きの裏山4町部購入の件、あぶらむの里の環境保全と林業体験プログラム等将来計画を考えて買うことに決めた。私はこれまでご支援くださっている皆様にあまり心配をかけてはいけないと思い、金銭的数字のことは極力書かないようにしてきました。しかし今回はこれまでの経過をある程度具体的に書かなければと思います。

あぶらむの経済はその8割は自分達の経済活動（宿の利用収入、木工、農業、講演活動等々）残り2割は会費、寄付収入等あぶらむをご支援下さる皆様方のご協力によるものです。

このご協力いただいている2割の額はあぶらむの里建設とその将来計画に用いさせていただくことに決め、私たちスタッフの生活費やあぶらむの運営費等は自力経済活動でまかなうことを基本としています。

そのようななかで将来への貯えとして800万円預金していました。売りに出された土地価格は1100万円でしたので、預金を全部はたけば残り300万円、私たちとすれば銀行借入れしたとしても5年ほどで返済できるだろうという考えでした。そして、その銀行借入れの一部分、皆様にご協力いただけたらありがたいという気持ちが正直なところでした。ですから特別に趣意書をつくったりと大事に対処するのではなく、あぶらむ通信前号に軽い気持ちで「あぶらむトラストへのご協力」のお願いを書かせてもらいました。私たちとしては1坪でも2坪でもご協力していただければそれだけでありがたかったのです。ところがフタを開けてみれば大変なことになってしまいました。多くの方々より1坪分、10坪分、100坪分、1000坪分とこの1年間で12,790坪分のご協力が寄せられました。私たちとしてはただただ驚くばかりで、ありがたさと申訳けなさとで一杯です。ご協力いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

これはもっとしっかりと働きなさいという皆様からのメッセージだと思っています。将来計画の1つの「小さな小学校づくり」を含めて、与えられたこのあぶらむの里を用いて人生の旅人への奉仕と共に、人生のよき旅人づくり、特に若い人たちの心の成長に関わる仕事に励みなさいという皆様からの叱咤激励と思っています。ありがとうございました。

そしてこれを機にあぶらむの会の法人化を加速させようと思っています。近年NPO法の成立によりこれまで同法による法人化を検討してきました。所轄官庁との間の事務仕事の繁雑さ等、人手不足の現状にあっては過度の負担となり今一つ積極的になれませんでした。しかしだからといって従来のままでいる訳にも行きません。この「あぶらむトラスト」を機にNPOによる非営利団体としての法人化を目指すべき準備をしています。皆様のご理解、ご指導、ご協力をよろしくお願い致します。

新しい年、皆様お一人々の上に豊かな平安がありますようお祈りいたします。

2002年12月

あぶらむの会　代表　大　郷　　博

あぶらむの韓日交流

2002年12月韓国より突然の訪問団があった。車興道牧師を団長とする韓国長老派教会の日本農業視察団一行13名だった。韓国で農村伝道に従事している人たち、農産物の生産とその自主販売で農民と生活を共にし自立援助しているという。日本にも夢見人がいるという話をきいてわざわざこの飛騨の山里まで訪ねてきた。私はその好意に韓国焼酎真露をもってこたえた。異国で飲む自国の酒、お互いボルテージが上った。楽しい一時だった。

翌朝、二日酔い気味の頭を寄せあい我々にできる韓日交流を話し合った。韓国を訪ね西大門刑務所で日帝時代の蛮行の事実を見るのもいい、また、ヒロシマやナガサキを訪ねるのもいい。しかしそれ以外にもっと我々でできることはないだろうか。

「韓国人戦争歴史多観。未来希望的現像見願」と筆談された趙牧師の言葉じゃないが、両国のこれまでの歴史をふまえたうえでの希望的建設的働きは何かを互いに話し合った。

本年７月、車牧師より突然連絡があり２名の青年のホームスティの要請があった。社長兼小使いの私、即断即決。小まわりのきくのが取りえのあぶらむの会、その場で二つ返事でＯＫした。

李相熙さん（イ・サンヒ）23才大学４年生、鄭兌榮君（チョン・テオン）17才高校３年生の二人だった。二人ともあぶらむがどんなところか十分な説明をうけることもなく、日本の富山空港に行けば迎え人がいるというきわめてラフな内容だったらしい。特に17才のチョン君は大変だった。あぶらむの住所さえ知らなかった彼が入国審査の際不審者扱いされ送還直前、疲れきった表情であぶらむへやってきた。

そんな彼らとこの夏１ヶ月余の生活が始まった。チョン君は私と一緒に土木や山仕事、サンヒさんは家事仕事。多忙な夏、働きづくめの毎日だった。

お互い言葉は通じなかったが気持ちはよく通じ合った。仕事内容を日本語で説明しても正確に理解した二人だった。言葉が通じても気持ちの通じない者と生活するよりも数十倍楽でそして助けられた。言葉というものはその背後に気持ち（心）がそえられていないと通じないというあたりまえのことを改めて教えられたこの夏だった。

そんな彼らから手紙が寄せられた。ありのままの生活を共有することの大切さを教えられた。今後ともこのような交流プログラムを継続していきたいと願っている。

尚、翻訳の労を取って下さった金丙鎭さんに心よりお礼申しあげます。

遠い地での気づき　李相熙（イ・サンヒ）

この春、ある集まりの場でよく存じ上げている牧師さまから日本に行ってしばらく暮らしてこないかと言われた。いや、言われたというより、そんな話が出たその場で行かせてくださいとお願いしたという方が正しい。高校生の時、私は始めて日本語を学び、日本という国に関心を持つようになった。その時以来ずっと日本に行きたいと思っていた。私の年頃の若い人たちは直接見たり経験したことがないのでましなのかも知れないが、韓国人であるなら誰しもどこかで日本に対するあまりよくない感情を持っているのは事実だ。そのせいか、日本という国に行きたがっている私に、周りの人たちは日本に対する固定観念でちょと悪いイメージを持つように表現こそすれ、いい話はしてくれなかった。そんな人たちに出会ったからだったかもしれない、私が直接日本と出会いたいと思ったのは。

ともあれ私は多くのことを身に付けていない姿で日本に向かった。初めはあれこれの本を手に取り、日本文化の勉強をしようとも思ったが、すぐにやめてしまった。いくら日本文化について書いたものであっても、韓国人の視線で書いたものなので、そういうことをたくさん知って行って、新たな本当の文化を私の中に一通り満たす前に、まず「韓国人」という判断の物差しで本当に大切なものをすくい上げることでできるだろうからだった。このように春から期待していた私の日本生活は7月の後半になってやっと始まった。7月19日、二十歳は超えていたが韓国の外に出たことが一度もなかった私が、言葉も韓国語しか知らない私が、同行者もなく目的地もよく知らないまま、宛もなく富山行きの飛行機に乗った。普段の「私」のことを考えてみると、まったく想像もできない行動だった。確実で、なじみのあるものばかり求めていた私だったのに…。しかし今考えてみると、日本に行きたいと思った瞬間からが祝福されることだった。

富山空港から自動車に乗って見知らぬ道を2時間ほど走り、40数日間を生活するあぶらむに到着した。日本の空港と町の風景を眺め、自動車運転席が韓国と反対なこと以外には、大きな違いは見つけられなかった。人々をたくさんは見られず、私は韓国から離れて来たという気持ちにはあまりならなかった。だが家に着き、初めて足を踏み入れた家の姿は、韓国の韓屋とは少し違う感じだった。木で造った二階建て、温突（オンドル）の変わりに敷かれた畳の床。日本のアニメーションで見たことのあるのとまったく同じ姿の家の中に入ったのだと感じたとき、初めて異国の地に着いたのだという緊張感を覚えた。見知らぬ地で一夜を明かし、次の日からはあぶらむの夏の中に入り始めた。たまに車に乗って買い物にでかけたりしたが、ほとんど外出せず、あぶらむの中で過ごした。限りなくぎこちない手つきで掃除もし、夏の間あぶらむを訪れる客人たちのために寝具を用意し、毎度の食事時間の前には台所であれこれの仕事を手伝った。私の手伝った仕事は、育さんと舞さんの担当部門だったので、私はほとんどの時間を彼女らとともに過ごした。彼女らの生活はたいへん規則的で、各自の受け持ちははっきりと決められていた。何日間は特別なことのない規則的な日常だったが、私なりに新しい環境に適応しようとしたせいか、たいへん疲れて早く寝床についた。だが繰り返される日常にだんだんとなれ始めてからは周りを見渡す余裕もできた。特に「言葉」という道具だけで人を知るのではないという事実、言葉が通じないからと言って心まで通じないのではないという事実に気づいてからは、人々に接しやすくなり、一日一日が早く過ぎていく時間がどうしようもなかった。一週間が一日のように過ぎ、毎日の日常の仕事に喜びを覚え、その中で意味を見つけることができた。なにかを得ようとして人為的な努力をしない時、始めて持つことのできる自由と平安と安息を、生まれて始めて感じた。夏中、新鮮な野菜を十分に得られるようにしてくれた畑で大きく育ったのを選びかごに入れる幸せ、黒く実ったブルーベリーを少しづつ集めて甘いジャムに作って貯蔵する喜び、夜ごと繰り広げられるとてつもない星たちの荘厳さ、生まれて始めて見るいろいろな生物まで、生活の場がすべて生に生気をあたえる羽に包まれとても平安だった。今まで何のことも思わずに暮らしてきたのに、人が自然と共に生きていくことが、どれほどに大きな祝福であるのかがその時に気づくことができた。

夜の一時、ホームステイボランティアの二人

あぶらむを訪れる人たちは、私が訪問した7月末から8月末までの夏に一番多かった。私はあぶらむについて何も理解していない状態で生活を始めたので、訪れる人たちの多様さにたいへん驚いた。教会の修練会、中・高等学校の同好会の集まり、大学生たちの農村奉仕活動、家族水入らずの休暇、同僚たちの団号の場としてあぶらむを訪ねる人たち、日本のどこに行ってあんなに多様な層の人々を私は一度に会うことができるだろうか。もちろん後から彼らの生活を見守る程度だったが、それだけでも二度とはないほんとうに貴重な体験だった。またたくさんの時間を一緒に過ごした人々のおかげで、日本について自分でも知らない内に持っていた少し否定的なイメージを100%脱ぎ捨てることができた。韓国と日本の過去の歴史を振り返り、希望的な未来を語られる真摯さ、人々と隔てなく交わり楽しむすべを知っている、開かれた心をお持ちの大郷牧師さま、私にはおよびもつかない大きなあぶらむの家事をとても上手に受け持たれる育さん、言葉の通じない私に嫌な顔一つせず何事もゆっくりと丁寧に説明してくれた舞さん（後では、同じ言葉でも舞さんの言葉は聞き取れるほどだった）、牧師さまの大きな力になっているひろすけさん（いつもどこかを怪我している姿が自然に思えるぐらいによく怪我していた）、日本生活の最初の頃、関心をもって激励してくださったニシヒラ先生夫婦、あぶらむ最初のボランティアとしてするべき仕事を教えてくださりたいへん助かったナオコさん、気さくでよく笑っていたナルミさん、毎朝新聞を持ってきて、午後には郵便物を見てくれた、サオリ、アカネ、ツカサ、勤勉で責任感のあるヒラノさん、優しく知恵のある母親の典型、トモミさん、その他にも名前を覚えていませんが、心の中に今までも残っているたくさんの人々のおかげで、本当に幸せでした。日本のことをよく知らなかったのにもかかわらず、どこかに持っていた韓国人特有の固定観念を、言葉通りに固定観念としてだけに留められるようにしてくれたすべての人々に感謝します。

最初に少し言及しましたが、あたらしく人に会ったり、新しい環境に適応して慣れることを拒否する傾向が多分にある人間です。周りがいくら言っても、それらを壊して得られることを放棄しながら暮らしてきたのです。ところがこの夏は私のそのような閉ざされた生活方式に新しい窓を開けてくれた本当に貴重な時間でした。

何も知らない状態で訪問した日本だったので、足を始めて踏みしめた瞬間に感じた空気からすべてを純粋に受け入れることができたようだ。少しもっと多くの理解をもって訪問していたなら、もちろんまた他のことを得られる機会があっただろうが、今回はどの共同体であろうと、外で他人が研究し理解したことを受け入れた後で言う言葉と、実際に私がその共同体に入り経験した後に言う言葉とでは天と地ほどの違いがあるこを学んだこと。それ自体に満足している。ほとんどの時間をあぶらむで過ごしたので、日本のいろんな姿を見てきたわけではないが、そんなことは少しも残念だとは思わない。夜遅くまで話しをしていた時、誰かが、日本を全部、あぶらむで見たような包容力があり自由なところとだと考えてはいけないと言ってくれたが、そんなことはゆっくりと学んでいっても遅くないのではないかと思えた。日本は韓国とは違うおかしな人たちの暮らしている国ではないという事実を経験した人として、尋ねる人たちに正直に言えることができたからだ。海を越えて日本に向かい、私が愛し慈しみたい人々がいつも、自分の役割を担いながら暮らしているだろうから、機会あるたびに訪れたいという気持ちを抱いて帰ったことだけでも、2ヶ月あまりの時間、得られるものの最高を得たと思うからだ。

富山空港に始めて到着した時、迎えに来てくださった牧師様との初めての出会いと、出発の日やはり直接空港に見送りに来てくださり、最後まで見届けてくださった牧師さまの姿が、本を書く時のエピローグとプロローグのように、私の初めての日本生活の始まりと終わりを飾ったまま、いつまでも忘れることができないだろう。

都会の時間と田舎の時間

立教新座中高生が今夏もあぶらむを訪ねてくれた。今年でもう５年にもなるだろうか。里山の生活体験から学びたいと炎天下のきつい下草刈りなど汗を流している。その中で彼らに１時間ほど話すという私の役割がある。昨年は「都会と田舎の違い、それは時間の違いである」という私が日ごろ思っていることを話した。

都会と田舎の時間の違い、都会は分秒時間であり田舎は年時間である。この年時間を無視して都会の分秒時間にあわせよう、追いつこうとしているところに自然破壊等を含めた我々の今日の問題があり、そして、分秒時間と年時間をどのように調和して行くかに、これからの課題があるということを話した。

中高生の若者にどのように理解してもらえるかと思ったが、皆真剣に受けとめ考えてくれた。

今年は「山と海との出会い」というテーマの話をした。実は昨年、海仲間と協力して「サバニプロジェクト」をたちあげた。忘れ去られいく沖縄の伝統的舟「サバニ」の造船技術を受け継ぐというものである。そしてもう一つ、海と山とが一つにつながてっていることを表現してみたかった。あぶらむの里にある杉の木で沖縄の舟サバニをつくるという「サバニプロジェクト」がこうして始まった。

５月５日子供の日私は敷地内に立っていた大きな杉の木を切り倒した。それまで幾度か切り倒そうと試みたが、その度木の気迫に押しもどされどこか恐くて切り倒すことができなかった。

６月４日沖縄から最後のサバニ大工新城康弘氏の来里が決った。もう時間的余裕はなかった。「お前はこれから生まれ変わって沖縄の舟サバニになるんだぞ」と引導を渡し、幹のまわりに酒をかけ短く祈ると共に一気に切り倒した。樹齢百年余りの木は無音のまま静かに倒れた。まきぞえをくった近くの木が大きな悲鳴をあげへし折れてしまった。

こうしてあぶらむの里敷地で育ってきた杉の木で沖縄伝統の舟サバニが誕生した。

私はそんな話を彼ら中高生に話して聞かせ、そしてアラスカで見た産卵を終え、川岸に打ちあげられた沢山の鮭の死がいの光景や星野道夫さんの遡上する無数の鮭の群やその死がいの写真などを彼らに見せ、海と山とがつながり、一体となって自然が営なまれめぐっていることを話した。

そんな私の話を彼らはどのように受けとめてくれたのだろうか。送られてきた文集に次のような一文があった。読んでいてとっても嬉しかった。これからもここでの生活を充実させ、次代を背負う彼らに自然との共生の一つの在り方を伝えて行こうと思った。

人と海と山との関係

立教新座中学校２年生　松岡洋佑

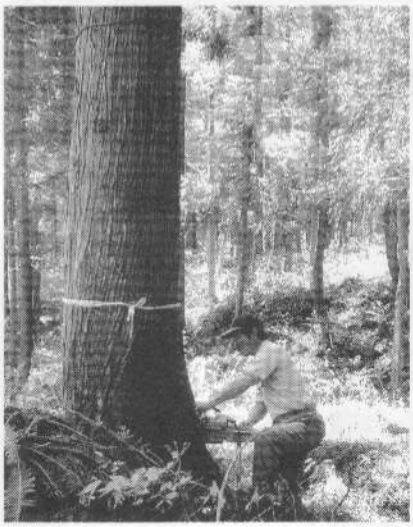
僕は去年に続いてキャンプに参加するのは二回目です。今回、一番考えさせられたことは、前回もとても印象的だった大郷先生のお話でした。特に二つのテーマは心に残り

ました。一つは都会と田舎の時間の差について、もう一つは海、山はつながっていて、私達の生活にも大きく関わってくるという事についてです。

都会では電車も時間ぴったりに来ます。また、会社員等の人々も秒、分をとても気にしていそがしい毎日です。逆に田舎では自然にかこまれながら時がとてもゆっくり流れていました。今回も自分自ら体験する事でそれを実感しました。また、田舎の人々を囲んでいる大自然にもそれらが見られました。一年、一年、ゆっくり大きくなっていました。どちらがいいとは僕には決めることはできませんでしたが、やっぱり人は生き物なのだから自然という故郷にいることで自分や周りを確実に大きく出来ると思います。

次に、海、山のつながりについての話を元に考えました。つながりの具体例の一つに大郷先生の趣味のサバニがありました。「海と山」と言えば僕には夏休みに山と海のどちらかに行くということで正反対のイメージをもっていました。しかし、それとは裏腹に、サバニでは優秀な山の木と、海の船乗りが一緒になっていることがわかりました。それは一見偶然みたいだけれど他にもつながりがありました。サケです。サケは川で生まれ、海へ出ていきますが、やがて産らんの時期になると再び川に戻ってきます。その時サケは山登りをし、卵を産むとやがて死んでしまいます。そして土となり、木達に栄養をあたえます。

つまりそこでも海と山はつながっていたのです。海と山の関係を今まで考えなかった僕はとてもおどろきました。別だと思っていたものがつながったのです。結局、人、海、山はたがいを無視して生活は出来ないのです。今回はそのことが一番の収穫だと思います。それを考えた上でもっと自然に触れていきたいです。



あぶらむの里の杉が沖縄の舟サバニとなる
（富山湾で進水式）

2003年　第7回　子供から大人までのネパールの旅

参加者募集

期　間：2003年3月25日(火)～4月5日(土)
お問合せ：あぶらむの会まで

2002年あぶらむこの一年

1月・一度は見ておきたい世界の旅、カンボジア、アンコールワット遺跡の旅
2月・今年の冬は平年並
・神戸国際大学礼拝堂家具一式納品
3月・第7回子供から大人までのネパールの旅　政情不安定の為中止とする。
4月・ＪＡ岐阜厚生連　看護専門学校新入生オリエンテーション・キャンプ
・第9回さくら道国際ネーチャーラン（名古屋－金沢250km）
5月・14日田植え
・高山日赤看護専門学校２年生研修会（同学年卒業をもって閉校となる）
6月・ゲシュタルト・セラピー研修会
・能登半島ヨット＆シーカヤックの旅（沖縄カヤックセンター共催）
・サバニづくり開始、完成
・岡林信康あぶらむコンサート
7月・ユンボ引退式
・サバニあぶらむ号進水式
・韓国よりホームステイボランティア２名来里
8月・各教会夏期キャンプ（岐阜バプテスト教会、岐阜加納教会、横浜クリストファー教会、富山マリヤ教会、一宮聖光教会、岐阜パウロ教会）
・立教新座中高校里山体験プログラム（３泊４泊）
・松陰女学院放送部合宿
・新建築者集団全国大会
・第４回あぶらむの里自然体験プログラム「森の恵み」
9月・高山日赤病院看護部研修会
・16日稲刈
・27日脱穀
10月・21日～28日　韓国訪問、監理教神学大学にて講演
・29日初雪
11月・１日諸魂庵にて逝去者記念式
・沖縄豊見城聖マルコ保育園保母さん研修旅行
・２日～４日季節はずれの雪となり木の被害でる
・冬野菜収穫
・越冬準備開始
12月・あぶらむ通信発行
・22日あぶらむクリスマス会

※2003年　どうぞよいお年をお迎え下さい

あぶらむトラスト報告

あぶらむトラスト　ご協力総坪数　12,790坪分
合 計 金 額　11,766,590円

協力者一覧

小野翠／安田英夫・和代／佃寿子／柳原信／石井秀夫／小池典昭／日本美容専門学校／大房建樹／渡辺洋一／丸山亘／鈴木眞喜子／林徹／矢後和彦・正子／松本昌子／下畑幹／内田八州成／立花泉／内藤武／富田高保・桂／紅林みつ子／加納美津子／串間千秋／水沢夏子／三沢悠子／川上詩朗・美砂／西垣正子／川崎東介／工藤真喜子／馬場慎也／伊東勇／南知子／笠松暾子／鈴木正士／梶原恵理子／木島出／青木裕二／直井雅子／小川卓／保木正平／下田英一、由香／小柳證／篠塚達／石田衣子／澤田一馬・実穂／米田博行／野田修治・洋子／野田文子／室谷政憲／中井章洋／福田聖子／山口節子／松山佳弘・奈津子／中村芳枝／宮本房江／佐藤一宏・孝子／梁田行雄／岡田廣志／渋澤一郎／丹安紀子／畫間洋章／鈴木孝雄／渡島悦子／宮城仲次／岡田斎／北林淳子／清水恒明／須間栄津子／岩坪瑞枝／高畑光男／畑井正春／掛川尚子／松田捷朗／岐阜バプテスト教会有志／加藤正／梅沢栄・雪子／伊礼キヨ／宮崎誠也／箕浦純子／中村正克・啓子／小泉恵子／進藤武／竹森せい子／高野アサノ／荒川紀恵子・紀子／名取麻子／荒井啓文・貴文／岩田牧夫／岩崎正／山下恭弘・由美子／長谷川秀司／土師晴子／久田広子／谷口茂雄／野田修助・和子／金子秀夫／片岡剛／上林由利／比嘉良侑・政子／石井正郎・光子／百井幸子／谷山幸子／河野正司・マリ子／岸井孝司、ミツ子／秋永厚子／高崎健一・由理／味岡和子／東野光男／浜中好美／清水秀明／萩原久子／渡島悦子／佐々木優／松井明子／筒井啓子／岩坪哲哉／山田哲／萱間美帆／猪野愈／吉植よし子／高橋保／笠井正志／小畠誠司／萩尾重行・楯子／鈴木信子／上村誠・洋子／大坪秀夫／加倉井誠・佳子／林原隆二／星野逸馬／浦和諸聖徒教会／保坂正三／松居勲／味岡努・敏江／青柳真智子／牛腸とも／武井秀雄・侑代／尾林玲子／大八木米子／長谷川牧子／杁山博・逸子／棚橋忍／本田リン／上田敏明／熊谷一綱／高島富美江／高瀬みち子／越田信／下堂前英一／本間勇吉／寺田信一／池崎純一／宗像和雄・千代子／山崎俊樹／園部秀穂・直子／山元澄子／大和田和子／河合順子／木俣貞子／畑野栄一／市川秀一・公子／俵里英子／小林賢三／片桐多恵子／指熊裕史・文子／高橋香代／西田浩子／渡辺トヨ子／市川聖マリヤ教会／長谷幸雄／木下春子／大塚梅子／横浜聖クリストファー教会／谷章子／小野成子／㈶勤労者住宅協会／森下祐子／藤倉待子／大郷博・育

寄付者一覧（'01年12月1日～'02年11月20日）

梶尾恵理子／小柳證／中村芳枝／外村民彦／祈りの家教会／平野淳子／鈴木孝雄／岩坪瑞枝／京野和子／内間安仁／鵜川雅行／相川喜久枝／俵里英子／市川秀一・公子／菊池栄三／谷市三／富永隆史・敦子／青木信之／小金井聖公会／菅野和子／浅川英明・尚子／山田益男／佐口哲／松尾正枝／友沢加代子／木俣貞子／園部秀穂・直子／湯田啓一／忍昭弘／坂本吉弘／　伊東俊典／熊沢洋子／萩尾重行・楯子／窪寺俊之／上村誠・洋子／小野成子／杁山博・逸子／尾林玲子／尾崎和廣／上田敏明／高島富美江／越田信／本間勇吉／菊澤満喜子／池崎純一／宗像和雄・千代子／黒瀬真一郎／箕浦純子／升本啓二郎／小泉恵子／松岡和夫／竹田純郎／高瀬留美／入川ヨシ／久田広子／渡辺直明／谷山幸子／市川聖マリヤ教会／細川哲士／岸井孝司・ミツ子／高崎健一・由理／東野光男・良平／越智香住／松井明子／佐藤緑／筒井啓子／佃寿子／宮古聖ヤコブ教会／大家俊夫／水野洋子／富田桂／紅林みつ子／株式会社アリミノ／串間千秋／千葉復活教会／鈴木博士／三沢悠子／吉田修／佐藤六郎／工藤真喜子／福岡女学院中学高等学校／木村秀子

新規会員（'01年12月1日～'02年11月20日）

植木友理江／三井頼子／岩坪瑞枝／岡崎一夫／松田浩／黄英博・鶴慈千玲／伊藤勉・文代／鈴木伸／米澤恵美子／山口節子／安田和子／木村幸夫／㈱ジャパンマネージメントサービス／岩沢満／荒井優仁・彩月／塩崎静江／石田衣子／寿崎かすみ／俵里英子／武原司奈

《「あぶらむの会」について》

「あぶらむの会」は旧約聖書創世記に出てくる、信仰の父アブラハムの旅立ちの前の名前、「アブラム」に由来しています。それによれば、彼はその内的必然性故に、安住の地を離れて「行く先知らずして」旅立ちました。全てに対してあまりにも安定を求める今日、私たちは旅としての人生に臆病になり、旅に必要な能力を欠いているように思われます。

「あぶらむの会」は、自己の人生に果敢に挑戦し、人生の良き旅人を育てるため、それに必要な訓練や出会いの場を提供してゆくことを目的としています。